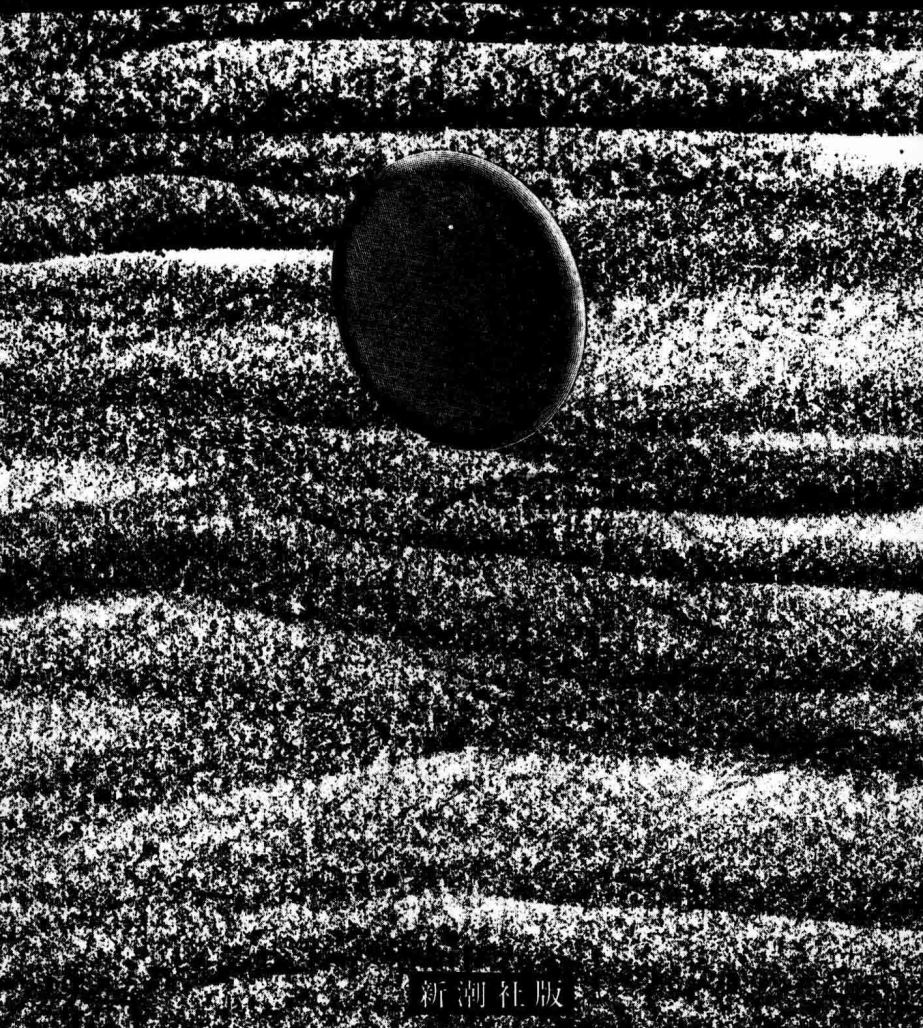




の砂漠

沢木耕太郎



新潮社版

著者略歴

昭和22年東京に生まれる。昭和45年横浜国立大学卒業。フリーのルポライターとして雑誌放送等で幅広く活躍中。著書に『若き実力者たち』『敗れざる者たち』『テロルの決算』がある。

ひと　さ　ばく
人　の　砂　漠

発行 昭和52年11月20日

13 刷 昭和55年11月20日

著 者 沢木耕太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

定価 950 円

〒 162 東京都新宿区矢来町71

業務部 (03) 266-5111

電話 編集部 (03) 266-5411

振替 東京 4 - 808

印刷所 株式会社金羊社

製本所 大口製本株式会社

© Kōtarō Sawaki, Printed in Japan 1977

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



人の砂漠／目次

おばあさんが死んだ

7

ひとりの老女が餓死した。一体のミイラと英語まじりのノートを残して……。その死の亀裂から『人生』の底知れぬ闇が姿を現わした。

棄てられた女たちのユートピア

37

房総半島の南端に、元売春婦たちの養護施設「かにた婦人の村」がある。そこは彼女たちにとって、本当に『弱者の楽園』だったのだろうか？……

視えない共和国

67

那覇から五百キロ、台湾から百七十キロの地点にある最果ての島・与那国。そこに奇妙な領海侵犯や密輸事件が続発しているという……。

ロシアを望む岬

139

お灯明をあげて『北方領土』がどうか帰ってきませんようにと祈る人々――「悲劇の岬」「望郷の民」という言葉とは裏腹の現実がノサップにあった。

屑の世界

155

仕切場（屑の集荷場）の仕事は、「ヤクザの下のしょうべえ」といわれる。様様の過去を秘めた人々が、そこに『敗者復活』の場を求めて漂い集ってくる。

鼠たちの祭り

189

徒手空拳から五十億円をつくり出す——相場場という魔物に取り憑かれ、勝負こそが『男の道』と、敗れても敗れても闘いつづける男たちがいた。

不敬列伝

219

戦後、不敬罪は本当に消滅したのだろうか？ 天皇をめぐる事件史の主人公たちが、背負わねばならなかった荷の重さとは一体何なのか？

鏡の調書

271

「金持ちの孤老」を装った老女に、ひとつの町が三年にわたって完璧に騙されつづけてきた。人々はなぜ、その『集団催眠劇』に参加していったのか？

装
幀
／
司

修

人の砂漠

おばあさんが死んだ

1

ひとりの老女が死んだ。

老いは誰にでもやってくる。人は老い、やがて間違ひなく死んでいく。とすれば、七十二歳の老女が死ぬことに不思議はないはずである。役所の統計に従って六十五歳以上を老人とすれば、日本には八百九十万人の老人がいることになる。その老女の死も、単なる八百九十万分の一の死ということですべては片付くはずのものだった。

普通であれば地方新聞の三行記事にもならないひとつの死が、小さい記事とはいえ全国紙の社会面で報ぜられたのは、その死の隣りにもうひとつの奇怪な老人の死が伴われていたためであった。

「静岡県浜松市上西町の借家で一人暮らしの末、栄養失調と老衰のため二十一日に同市内の病院に収容されたままさびしく死んだ老女宅の奥六畳間からミイラ化した実兄の死体が二十三日午後、あとかたづけに來た同市福祉課員らに

発見された。

浜松東署で検視をした結果、この老人も老衰または病死で、書き残された老女のノートから四十九年七月四日に死亡、そのままの姿でフトンに安置されていたものとわかった。老女は死んだ実兄のほかに身寄りもなく、また葬式を出す金もないまま、死体と生活を共にしていたとみられている。

老女は無職佐藤ちよさん（七二）。二十日に自宅内で『ウーン』というちよさんの悲鳴を聞きつけた近所の人が救急車で同市内の日赤浜松病院に運んだ。が、翌二十一日、消えいるように死亡。一人暮らしの老人の死として、市福祉課が死後の世話をするようになった。

このため、二十三日午後二時ごろ、同課員らがあとかたづけと葬式の準備をしようとしてちよさん宅に入ったところ奥六畳間の敷きつ放しのフトンの上に男の死体があった。全身茶褐色でミイラ化しており、裸で毛布を抱え込むようにしており、外傷などはなかった。

浜松東署でさらに調べたところ、死体はちよさんの実兄で東京都文京区生まれ無職敏勝さん。同室内にあってちよさんのノートには『四十九年七月四日、諸症状病を起こし、生命を終わる』と記されていた。このことから同署は、敏勝さんが一昨年七月に七十八歳（当時）で息を引きとって以

後、ちよさんは死体をそのままの状態であ置、自分は死体のわきに座ブトン敷いて寝起きしていた、とみている。

ちよさんは七年前から同家を借りて住んでいたが、人が出入りするのを極端にきらい、民生委員や警察官が巡回訪問しても雨戸のすき間から話をするだけ。中には入れず『施設に入れ』といった忠告にも『他人の世話になるのはいやだ』と断っていた、という。ちよさんは旧制大学を出たと生前話しており、自宅に残された十冊のノートには英語などでピッシリと書き込みがしてあった。

この、事件ともいえぬ事件が、全国紙の紙面を飾ったのは、なによりも「ミイラ」の存在が記者たちの眼に猟奇的に映ったからだ。どの新聞も「ミイラの兄と一年半・老女も餓死」といった見出しを掲げていることからわかる。しかし、日々あふれるように流れてくる事件の洪水の中で、ぼくがその老女の死に蹟き、ふと足をとめたのは、決して「ミイラ」だけが理由ではなかった。

まず、英語などで書き込みがしてあったという「ノート」である。新聞記事に付された小さなぼんやりした写真からは、乱れた文字の、断片的な、ほとんど呪文に近い文章を読み取ることができた。

「四九・六・二五（火）

EXHAUST 総テ断絶 自

決

四九・六・二九（土） ETERNITY

四九・七・四（木） 細胞ノ死滅 POISON化ハ永

年蓄積遂ニ癌化シ 諸症状病ヲ起シ生命ヲ終ル

四九・七・一〇 ETERNITY解決セズ 無理無駄

デアル

ETERNITYは永遠、EXHAUSTは疲れたとも訳すのだろう。兄の死の前後を記したと思われるこのノートには、解説不能な暗号がちりばめられているようだった。何から「総テ断絶」されたのか、ETERNITYを解決するとはどういうことだったのか、そして何が「無理無駄」であったのか。老女の残したノートの他の部分には、どのようなことが書かれてあるのだろう。読んでみたい、とぼくは思った。

ぼくが老女の死に蹟いたもうひとつの理由は、「他人の世話になるのはいやだ」という言葉だった。餓死を目前にしながら、なお他人の施しを受けたくないと頑強に主張する。その拒絶の意志のようなものが、強くぼくを撃ってきただ。

「ミイラ」の存在と英語まじりの「ノート」、そして外界を拒絶するかのような「言葉」。この三つのものの中には、新聞の見出しである「老人の孤独な死」というだけでは充分に収まり切らない、暗く深い闇が横たわっているような

気がした。

「ミイラ」と「ノート」と「言葉」の間には鋭い亀裂が走っている。しかし、その鋭さは八百九十万人の老人たちの、その「生と死」の断面の鋭さを、あるいは象徴しているのかもしれない。

ひとりの老女が死んだ。二月二十一日、春にはまだ遠い、北東からの風が吹く寒い日の午後だった。

2

二月二十日の午後四時頃、会社員倉田昇の妻、義江は、私道を隔てた向かいの家から、低い呻き声のようなものが聞こえてくるのに気がついた。

倉田夫妻は浜松市の新市街とでもいうべき上西町の文化住宅に住んでいた。地番一〇五七の向かいの空地に三軒の賃貸家屋が建ったのは七年前のことである。そのうちの二軒は何度も借主が変わったが、私道を挟んで対面している一軒だけは、同じ借主が七年間住みつづけていた。そこには二人の老人が住んでいた。入居した翌日から、一度として雨戸を開けることもなく、その老人たちはひっそりと暮らした。

倉田義江は夕餉の惣菜そうさいを買いに近くのスーパー・マার্ケ

ットに出かけようとして、その家の中から呻き声を聞いたのだった。あるいは猫の鳴き声かもしれない、とも思った。構わず買物に行こうと思ったが、どうしても気になって仕方ない。町会長や民生委員から、この家には老人がひとりで暮しているのでどんなことが起こるかわからない、ひとつ何かと気をつけて見ていくと頼まれたことが、頭の片隅にひっかかっていたのかもしれない。

その家には長く二人の老人が住んでいた。近所の人々は夫婦だと考えていたが、兄妹ということだった。町籍簿にも自分たちの手でそのように書いて提出していた。だが、この一年半ほど前から兄の姿がふつつりと見えなくなっていた。ひとり残った老女は《かた 躰を悪くしたので、東京に行って療養している》と家主などには説明していたという。

倉田義江は二度、三度と家の周りを歩きまわった。やはり呻き声は人間のもののようだった。南向きの六畳間に面した一番はじの雨戸を、彼女は力をこめてはずした。家の内部は暗かった。七年にして初めて見る部屋の内部だった。一歩なかに入ると、激しい異臭が鼻をついてきた。石油と汚物の臭いが混り合った、胸がむかつくような臭気だった。部屋の中は、畳の目が見えないほどさまざまなものが散乱していた。それらに埋まるようにして、老女が俯うつむせになって倒れ、呻いていた。老女は汚物にまみれ、瘦せ細ってい

た。倉田義江はその姿を見つけると慌てて外に飛び出した。家に戻り、一一九番に通報した。

《上西町です、お婆さんが死にそうです！》

とまず叫んだ。

浜松救急隊の大川重雄は、同僚の二人と共に、中部瓦斯の巨大なガスタンクを目印に上西町の現場に急行した。老女は強度の栄養失調に違いない、と一目でわかった。部屋中に、しゃぶりつくした梅干の種がいくつも散らばっているのが大川の眼にとまった。タンカに移す時、老女は激しく暴れた。まず、将監町の黒川内科病院に運んだが、手の施しようがないということで、救急車は、高林町にある浜松日本赤十字病院に向かった。

その日、赤十字病院の内科の宿直医は吉原真だった。救急隊の手によって運び込まれた患者を見て、吉原は激しい衝撃を受けた。学校を出て五年、それ以来いったい何千、何万の患者を診てきたことだろう。しかし、これほど凄じ

い患者を見たことはなかった。

牀は糞にまみれ、尿が染みつき、衣服は洋服か寝巻のかさえわからなくなっていた。恐らく一年以上も洗濯をしてないのだろう。そして何カ月も風呂に入っていないようだった。垢がこびりつくというより、垢が皮膚になっ

個室がひとつも空いていなかった。廊下に寝かせるわけにはいかなかったので、六人部屋の三六一号室に、とりあえず入れた。看護婦が老女の牀を丹念に拭いたが、牀に染みついた臭いは消えず、異臭は三六一号室ばかりでなく、その階全体に漂うかのようなだった。

明らかに栄養失調だった。それも強度であったために脱水症状をおこしていた。はたしてあと一日もつだろうか。吉原はそう思った。皮膚は干からびていた。下半身から冷めたくなりかけていた。脈は触診によっても測れなかった。点滴をしようにも針を刺す血管が見つからない。大腿部の肉を切り、血管を探し、血管を切り、そこから流し込むようにして点滴した。

それまでに、吉原も何人かの行き倒れや栄養失調者を診たことはあった。しかし、現代という時代にどうしたらこの老女のように壮絶な栄養失調になれるのか、彼には疑問だった。

しばらくして、浜松市役所から福祉課員がやって来た。

救急隊からの連絡を受けたのだ。はじめ救急隊からの連絡では「佐藤キヨ」ということだった。福祉課のリストには、その名に該当する老人はいなかった。人口五十万人の浜松市に、老人のみの世帯は千三百三十二を数える。その中で、ひとり暮らしの老人世帯は七百九十。七百九十のリストの中

に「佐藤キヨ」はいなかった。

係長の村田健造が首をかしている、ケース・ワーカーの森壮一が、それは「佐藤千代」の間違いではないかといひ出した。森は上西町一帯を担当するケース・ワーカーだったのだが、ちょうど一カ月前、佐藤千代の家を訪ねていた。その時の強烈な印象から、「餓死寸前の老女」であるなら、佐藤千代に違いないと直観的に思えたのだ。再度確認し直すと、やはり佐藤千代だった。村田と森はとりあえず病院に急いだ。彼らが医師に容体を訊ねると、どのくらいもつかわからないという答えが返ってきた。

看護婦の勤務には、日勤、准夜、深夜とあるが、その日深夜勤務にあたり、老女の看護を受け持ったのは岡善子だった。軀は衰弱しきり、意識もほとんどなかったが、名前を呼ぶと《はい》と応えた。《わかる?》と訊くと《わかる》と呟いた。

しかし、老女は、医師にとっても看護婦にとっても、あまりよい患者ではなかった。ベッドの上で激しく暴れた。心電図をとろうとすると、どこにそのようなエネルギーが隠されていたのか驚くほど暴れた。それは単に苦痛からというだけではない拒絶の態度だった。医師の吉原に向って、畜生、この野郎、馬鹿野郎と、呻くように罵りつづけた。なぜだかはわからないが、この人は自分たちをひどく憎ん

でいるようだ、と吉原には思えてならなかった。

そして、老女が憑かれたように呟いていたのは、自分は医者であるということ、文子という娘がいるということだった。しかし、その住所は誰もわからなかった。一カ月前に訪ねたケース・ワーカーの森も、身寄りの住所を教えておいてくれという申し出を、にべもなくはね返されていた。

深夜になると、老女はいくぶん静かになった。罵声も発しなくなった。そのかわりに、

《おかあさん、おかあさん……》

と哀しげに叫ぶのを二度ほど岡善子は聞いている。七十二歳の老女が《おかあさん》と叫ぶ姿に、岡は少し背筋が寒くなるのを覚えた。

夜が明けて、ほとんど測れなかった脈がようやく六十まで数えることができるようになった。医師も看護婦も一時は好転したかと思った。

しかし、午前十時過ぎに、村田、森らの福祉課員が、老女のために新しい寝巻と下着を買って、持ってきた時には再び危篤状態に陥っていた。前日、課員同士が囁いていた《やっぱり葬式は土曜か日曜になるのかな》という勘が当りそうだった。奇妙なことに、福祉課が扱う老人たちは、参会者の都合を考えたわけでもあるまいが、どういうわけ

か土曜か日曜に葬式が行なわれるようにしてひっそりと死んでいく。もっとも、福祉課員にとっては、それは休日にも仕事をしなくてはならないということであったが。

老女の容体は悪化の一途を辿った。部屋は三六一号室から三六六号室に移された。三六六号室は看護婦室のすぐ隣りにあり、壁はガラスの素通しになっている。一刻も眼を離せない患者、つまり危険な状態の患者を入れる個室だった。

意識がどんどん低下していった。瞳孔その他の反応がすべて鈍くなってきた。医師はやがてホスミンを射った。心臓の刺激剤とでもいうべきものだが、これによって助かったという例があるわけではない。医師の気休め、といった悪ければ死を確認するためのひとつの儀式といつてよい。

正午を過ぎて、老女はすべての反応力を喪った。医師は人工呼吸を試みたが、再び心臓が動き出すことはなかった。午後零時十三分、吉原は老女の死を確認した。まさにそれは「確認」に過ぎず、死はそのかなり前に訪れていたようだった。

「死亡年月日 昭和五十一年二月二十一日午後零時十三分
死因 心不全（心不全の原因は高度栄養失調兼脱水症）」

医師、吉原真は死亡診断書にそう記した。

午後零時半、福祉課に佐藤千代死亡の報が入った。近親者を探す手掛りはまったくなかった。千代に関しては住民票の登録すらされてはいなかったのだ。身寄りのない孤老の死には、福祉課が葬式などの諸事一般を引き受けなくてはならない。しかし独断で事を運ぶのはためらわれた。ひとりきりの老人の葬式を課員の手で済ますと、それまで放っておいた身寄りが現われ《どうして勝手に焼いてしまった、一目だけでも会いたかったのに》という出ず例が少なくなかったからだ。遺体はひとまず浜松医科大学で保管してもらうことにした。

ケース・ワーカーの森壮一は、千代の借家に近親者か知人を探す手掛りになるものが残されているかもしれないと考えた。しかし、その家の持主である湧田良二は、その日の朝から浜松商工会議所の経済部会研修会で関西に出かけていた。犯罪者でもないのに、いくら死んだとはいえ無断で他人の家に踏み込むわけにはいかなかった。すぐにも家主を同道して探したかったが、湧田は翌日の日曜日の夜までは帰らないという。仕方がない、月曜日に改めて出直して、家主と共に家に行こう。葬式はそれからでも遅くない。森はそう考えた。

二月二十三日、佐藤千代が死んでから二日後の月曜日、森は家主の湧田と共に、生前、佐藤千代が住んでいた上西